# 第６回　練馬区小中一貫教育推進会議　会議要録

| | | |
|---|---|---|
| 開催日時 | | 平成 26 年９月２日（火）　午後２時～４時 |
| 会　場 | | 練馬区役所本庁舎 12 階　教育委員会室 |
| 出席者 | 委　員 | 葉養正明、岡田行雄、坂田直哉、諸井良治、木下川肇、吉羽哲夫、中山　徹、松丸晴美、佐野　匡、大瀧訓久、郡　榮作（敬称略） |
| | 協力委員 | 飯塚将史、福島博史、岡田孝子、矢澤義人、河西敦子 |
| | 事務局 | 教育振興部 |
| 傍聴者 | | なし |
| 案　件 | | （１）　今後の小中一貫教育校について<br>（２）　小・中学校の組合せのさまざまな状況<br>（３）　小中一貫教育推進会議　議論のまとめについて<br>（４）　その他 |

副委員長

ただいまより、第６回練馬区小中一貫教育推進会議を開会いたします。

本日は、委員長から遅参の連絡が入っていますので、委員長到着まで私が司会を務めます。

はじめに案件１「今後の小中一貫教育校について」、事務局から説明をお願いします。

事務局

（資料１～４　説明）

副委員長

今後の小中一貫教育校のあり方について検討するということで、今、４つの資料が示されましたが、ただいまの説明に関して何かご質問ございますか。

委員

資料１の裏面ですが、小中一貫教育校検証部会で、現在、検証を進められているということですが、現時点でどういう流れになっているのか、教えてください。

事務局

検証部会は、昨年度から５回開いております。昨年度は検証方法、あるいは検証の項目を準備段階として整理したところです。今年度、その検証項目や方法に基づいて作業をしているところです。

この夏休みの期間に、児童、生徒、保護者、教職員、地域の関係の方々などに意識調査を行いました。また、抽出ではありますが、教職員、地域の方々などにヒアリングを行って、検証

に使用するデータを集めている状況です。
　９月以降の検証部会の中で具体的に検証を進めていくという段階にあります。

副委員長
　ほかにございますか。
　委員長が到着されましたので、司会を交代いたします。

委員長
　遅れて申しわけございません。
　今の件につきまして他にございますか。
　お気づきの点がございましたら、後ほどまたご質問等、承りたいと思います。
　今回は案件の数を少なくしてあり、先生方に十分ご議論いただこうと考えているところです。練馬区における小中一貫教育をどのようにこれから先、具体化に持って行くか、イメージを固めていかなければならない段階になっていますので、いろいろな角度からご議論いただければと思います。
　今までこの会議での議論や資料を踏まえて、練馬区における今後の小中一貫教育校のあり方という問題について、ある程度、方向付けを考える段階に参ったと思います。いろいろな観点から、少しご議論をいただければと思います。

事務局
　事務局から補足します。先ほどの資料１の裏面のところで触れましたが、小中一貫推進方策では２校目の小中一貫教育校を検討するということにしており、校舎の改築計画や学校の適正配置を検討する際には、小中一貫教育校の可能性についてもあわせて検討していきたいと考えております。各委員からいただくご発言もこれにつながるご意見と、事務局は受けとめていきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

委員長
　全体的にどのように制度設計していくかという問題も考えなければいけないのですが、とりあえず、２校目ということで案が出されております。３校目、４校目、５校目となっていったときに、どういう進め方をしていくかとか、施設一体型で全部できるのか、できないのか、できない場合に、どのように全体をさばいていくかというようなことも考えなければいけません。国のほうでは近々、小中一貫校の制度設計を終わらせるという動きもあり、学校教育法の中に位置付ける下準備にもう差しかかっています。それがどういう設計になってくるかによっても練馬区の小中一貫教育の定義をどうするのかとか、全体像をどうするのかということに影響があると思います。そういうまだ不確定な要素もあります。

委員
　教育委員会として２校目をつくるということを決めていません。今後の小中一貫教育校を検討するときに、２校目をどうするかという議論はいいのですが、２校目に的を絞って議論されてしまうと、ちょっと話がずれてくると思います。今後、小中一貫教育校をつくるときには、

こういう形でつくればいいねという議論をしていただければと思います。
小中一貫の正解というのはないと思うので、ざっくばらんに、思いつくことをぜひ言っていただきたいと思います。
例えば、隣り合わせの小中一貫教育のグレードが高かったときに、その周辺の小学校にどの程度の連携の濃さでやれば公教育として成り立つのか、そういう議論もしていかないといけないのかなと思っています。ぜひよろしくお願いします。

委員長
国のほうからも、適正配置の問題もあるのですが、多分、小中一貫校の規模の問題が出てくるのではないかと思います。連携型の緩やかな小中一貫校をどうするのかということも、まだはっきりしていません。国の制度改革室の中に小中一貫校プロジェクトがあるのですが、どうも小中一貫教育学校の制度化のほうが先行しているようです。文部科学省の来年度の概算要求の中にも、地方創生がらみで適正規模、小規模校問題が出てくるかと思ったら、何も出ていませんが、小中一貫教育学校は出ているということです。
適正規模を全国的に扱うには、多分、非常にタイミング的には悪いと思います。もしかすると小中一貫校のほうに引きつけた適正規模というか、標準規模をどういうふうに考えるのかというあたりをとりあえずやって、一般的な適正配置問題は、タイミング的には４月以降かなと予想しています。
ということで、まだわからないところが結構あるので、もうちょっと状況を見ながら判断していったほうが練馬区としてはいいのかなと思います。
そういう意味で、今はビジョン段階のところでいろいろ議論していただいておいて、国の動きが分かった段階で具体的な制度設計に入っていったほうがいいのかなという感じがします。全区的にどうするのか、こういう問題をどのように考えるのかという、少しフランクな議論をお願いできればと思います。
ＰＴＡ関係のお２人がおられますが、保護者の立場でいうといかがでしょうか。

委員
小中一貫をどのように進めていくかというところでは、子どもたちの学力向上や、中１ギャップの軽減ということも趣旨に含まれていたかと思います。今、小学校６年生、中学校３年生という制度をシステム的に変えていくという動きもあるようです。
子どもたちの学習の中での成長過程というのが、今までとは少し変わってくるのかなと思うのですが、実際に小中一貫教育に取り組んでおられる先生方に、何年間か実践してみて成長の速度が変わっているとお感じになっているか、お聞かせいただけたらと思います。

委員長
協力委員の先生、一言ずつでも結構ですが、今、おっしゃったようなこととも絡めて、ご発言いただけないでしょうか。

協力委員
資料６の（２）の必要性の文面がまさにそのとおりだと思います。２行目の後半にある、中

学１年生の不登校の増加。これは小学校と連携がとれていれば、随分回避できたのではないかと思います。事情がわかっていれば別のアプローチでよくなっただろうというようなことを経験してきています。

その次の行の、小中の教員の指導の仕方の違い。小学校の先生と勉強させていただく中で、「あ、そういうことだったのか」ということが確かにありましたので、やはり小中一貫をやっていく意味は非常に大きいと考えています。

それから、部活動では、ようやくうまくなってこれからというときにもう受験でおしまいになってしまいます。小学校の頃から親しんでいれば、ものすごく技術的にも高くなるだろうと想像できます。

そういうこともあって小中一貫を望むところです。ただ、部活の体験は中学校で実施していますが、小学校から中学校へ来るまでの間の安全面を考えると、学校が同じ敷地にあるということが望ましい形なのかなと思います。移動に伴う危険回避という面でも一体型の小中一貫校ということで考えていってほしいと思います。

協力委員

お話を伺っていて、何をお答えしていいのか具体的に話しにくい状況です。相互にかかわりを持っており、１つだけ解決するということはまず難しいと考えています。一言で言ってしまうと、先行する大泉桜学園でうまくいかなかったところを検証し、その結果を見て修正していけばいいのだろうということになります。

これには学校規模などが当然関わってきまして、部活動の話が出ていますが、規模が大きければ部活動は強くなります。規模が小さいと部活の数も少なく、生徒は選べなくなります。そういう問題も出てきまして、一律に規模の問題と部活とをすぐくっつけるということは大変難しいと思います。配置の問題についてはくっついていたほうがいいと思います。

そうすると、小学校、中学校のあり方を全部見直すところまで話を持って行かないとうまくいかないかなとも思えてきます。となると難しいので、１つ２つ一体型の小中一貫校を練馬区で頑張ってつくってみるのであれば可能かなと思います。今、小竹小学校と旭丘小学校と旭丘中学校で小中一貫の実践をやっていますが、旭丘小学校と旭丘中学校は地理的な関係で結びつきが強く、やはり小中連携、一貫教育を考えたときには一体型が望ましいと思います。財政的な面を考慮せずに言えば、一体型の小中一貫教育校を作ってみるとよいのではないかと思います。

規模をどうするかはかなり難しいと思います。１つ決めてやってみて、先行してうまくいかなかったところを修正しながらやっていくしかないのではないかと思います。練馬区が進めている施策ですので、進めている途中で、やはりやめたというのはいかがなものかと考えています。

協力委員

大泉桜学園でいろいろな成果が上がっています。それから、我々も実践校グループになって先行して研究をして、いろいろな成果が上がっています。お互いに理解するだけでも、授業への取組み方、子どもに対する接し方が、小学校の側も中学校の側も改善されていますし、連携することで、互いに顔がわかって、話をしていけば気持ちも通じていきます。そういう意味で

も、学校間の距離はできるだけ近いほうがいいし、できるだけ一緒にやったほうがいいというのは当たり前だと思います。

小中一貫校をつくるのであれば一体型がいいと思います。一体型ならできることが、分離型ではできないということは出てきます。分離型でも、隣接しているのとさらに離れているのとでは、制約がどうしても出てきます。私たち現場の職員としては、やりたいことはできるだけ実現したいというのが一番の願いです。施設一体型の学校ならできるのに、本校は分離型で距離もあるからできないというのが一番悔しいことです。

この政策を進めていかれるのであれば、やはり施設一体型をつくっていただきたいというのが一番の願いとしてはあります。私たちが連携クリエーターをやっていて一番もどかしいのは、一体型の大泉桜学園だったらこんなことまでできるだろうなと思ったことが、今できない。たとえ分離型であっても、１つの学園であれば、旭丘中学校の先生と、旭丘小学校の先生ともっとこんなこともできるのにと思っていてもできません。

私たち連携クリエーターは、もっと交流したいという思いでいます。でも、一般の教職員はそこまで思っていませんから、その人たちに対して、もっと一緒に交流したいのだけれどもと、そこから説明しなければなりません。みんなの気持ちが一緒になって、せっかく上がっている成果をみんなで共有し、子どもたちに返したいという気持ちが一番あります。

小竹小学校と旭丘小学校では先日、小学校１、３、５年は小竹小に、２、４、６は旭丘小学校に行って、午前中、交流しました。そういうことをやって、一番喜ぶのは子どもたちです。そして、先生方もその姿を見て、やはり一番いいなと思うのです。ただ、それをもう一度やろうかとなると、もう日程もかなり厳しいですし、事前の打ち合わせをする時間もなかなか取れないのです。

近くであれば、すぐできるし、１つの学校であれば、いつでもできるわけです。そういうことからしても、この施策を本当に進めていただきたいと思っています。特に今、旭丘小学校の人数がかなり少なくなっていて、交流して「何が一番楽しかった」と聞くと、「鬼ごっこで捕まえるのに苦労しなかった」という答えが返ってくるという状態なのです。普段、鬼ごっこをするのにも、旭丘小は校庭が広いので、例えば一学年 20 人ぐらいで鬼ごっこをやると絶対に捕まりません。それが 60 人いれば、それなりに捕まるわけです。子どもたちもやっていて楽しい。人数の多い学校では楽しい遊びも、学校によってはきつ過ぎてできません。やはりこういう状況は、すぐにでも改善してあげたいと思います。

協力委員

施設一体型の小中一貫校がたくさんできてきたら本当にいいなと、聞けば聞くほど思います。私はかなり距離がある学校との交流を始めて３年目ですが、１年目、２年目は１つの中学校と１つの小学校の交流でしたので、クリエーターの力というか、クリエーター同士で強引に週１回会って、先生方とも必ず職員室で会うようにしました。小学校の先生もいる場所であれこれ言いながら、中学校の先生も何とか足をたくさん運んでくださって、交流の機会も持てました。２年間で「いいな」とすごく実感しました。

ところが、ことしから実践校ということで、小学校２校と中学校１校の３校になりました。去年まで連携していた２校は同じ感覚で前に進んでいるのですが、新たに一緒にやることになった小学校の方々の気持ちの高まり方が違うというか、何でこういうことが起きるのかなとい

うようなことを思ってしまうことが多いのです。会議を開催することもすごく苦しくなってきて、回数がどんどん減っていっています。４つの分科会をつくってやっていますが、分科会によって進むところと停滞してしまうところができて、昨年度までのように「大泉桜学園のようなことができたらいいね」みたいな発想でものが進んでいたことが、なぜ止まってしまうのだろうというのが今、正直な悩みです。

ただ、算数・数学部会では３年目になって、非常に細かいところまで議論ができるようになってきて、それが児童・生徒の学力の向上に絶対つながっていくなという実感を持って進めることができています。距離のことも確かにそうなのですが、熱き思いの違いをどう乗り越えていったらいいのか、現場にいるとすごく悲しくなることもあるし、うれしくなることも多いのです。

これだけ多い学校数の区で、全校で取り組んでいこうと決めたことは、すばらしいことだと思います。その思いをみんなのものにしたいと思います。教員みんなのものにしていくために、全体で何かできることがないのかなと思います。小中一貫の連携をしていくことによって、しまっていらっしゃったアイデアなども全てを外に出していただけているというのが実感です。「あの先生、こんなことができる方だったのだな」とか、そういうことが小学校でも中学校でも見えてきています。練馬区全体でもいろいろな先生方との交流というのはすばらしいな、それは絶対、児童・生徒のためになっているなと実感し、そういう方向が見えてくると、いろいろな施策が前に進むのかなと思います。

委員長

もう１つ、組み合わせの問題について、検討していただくことになっておりますが、良さはだいぶいろいろ指摘されてきました。ただ、小中一体型のほうが、分離型に比べたら地理的に近いところにお互いにいるわけですから、打ち合わせなどにしても非常にやりやすいというご発言がありましたし、今まで品川などと関わりを持ってきた立場から言うと、やはり施設一体型はうまく行くのですが、分離型というのは難しかったですね。相当時間がかかりました。

だから、品川の場合は、カリキュラム面をてこにして、施設分離型についても一体型と同じような指導体制がとれるようにという方向に動かしていったと思います。品川区版の学習指導要領を作りました。そういう筋道を練馬はたどれるのか。96 校もあるわけです。品川などの例を見ていると、全区の教務主任さん総がかりで、相当な労力を費やしています。カリキュラムをいじるというのは非常に大変です。若月教育長が、「文部科学省があれだけのメンバーをそろえて作っているものを、ゼロまで戻していって、品川区バージョンなんて作れないよ。はっきり言って」というようなことをおっしゃっていました。

それはそうだろうと思います。相当エネルギーを注いで国の教育課程基準をつくっているわけです。ですから、それをベースにということはあったとしても、小中一貫とか小中連携ということを考えていった場合に品川区版のものがなければいけないだろうというので、相当大変だというのは重々承知で教務主任会にフル稼働してもらって作り上げたと聞いています。

練馬の場合、多分分離型が残ってしまうのですよね。ブロックに分けたとしても、それぞれのブロックの中の学校の配置ひとつ見ても、これは簡単にはいかないですね。分離型が相当残っているということを前提にしながらも、連携することのよさをたくさんの先生がおっしゃっていましたので、連携を何で担保するかという点に絡めて、少しご発言いただければと思いま

す。

協力委員

現場の教員の考えについては、前の４人の先生方がたくさんおっしゃってくださったので、少し広い立場から考えていくと、教員の中でも、クリエーターとしてやっている人と、そうでない人たちの間で意識差があるのが現状かなと思います。保護者の方も中高一貫教育に比べて、小中一貫教育への意識というか関心は格段に低いのではないかと、正直思っています。

保護者の方と接していく中で、どうして中高一貫教育に関しては関心があるのに、小中一貫教育というと、「ん？」という感じになってしまうのかを考えていくと、我々教育に携わる者の意識が統一されていなかったり、ＰＲ不足が原因の１つになっているのではないかと考えています。

「小中連携すれば、一貫教育を実施すれば、義務教育の９年間でこんなこともできるのですよ。こういうことを子どもたちの中に残すことができるのですよ。」というところを、もっと区民の方に知っていただかなければいけないと思っています。その意味で大泉桜学園という一貫校を練馬区が作ったということは非常に意義深かったと思います。大泉桜学園を足がかりにして、施設一体型の学校として２校目、３校目を作っていくことも、小中一貫教育をＰＲするための、また保護者の方や区民の方に理解していただくための大きな材料になると思います。今委員長がおっしゃったカリキュラムづくりという点でも、２校目、３校目というところで保護者や地域の方の小中一貫教育に対する意識が上がってくると思います。

では、ほかの学校ではどうしているのかというようなところに当然、話がつながってくると思いますので、そこで必ず練馬区の中で小中一貫教育のスタンダードを見せてくれという機運も高まってくると思います。そうすると、我々教員の側も、そういうものを全員がきちんと持ってやらなければならないという意識の向上につなげていくこともできるのかなと思います。他区、他市から異動されてきた先生方に関しても、練馬区ではこういうことをやっているのが当たり前なのだという発信につながるのかなと思いました。

小学校６年生から中学校に行くときに、今の段階では私立や都立の中高一貫校の人気が高かったりしていますが、我々は小中一貫教育というものを非常に重視してやっていますし、こういうメリットがあるのだというところを、教員の中にもっと強く意識づけする必要があると思います。また、区民の方、保護者の方にも小中一貫教育をやることで、練馬区の子どもたちにこういう力をつけさせることができますよという発信がもっと必要になってくると思います。２校目、３校目の一貫教育校はそのために役立てる、そういう学校であってほしいと思っています。

委員長

根本的な問題というのが絶えず絡んでいて、小中一貫教育の成果とか、ねらいはみんな持っているのですが、ではそのねらいはどの程度達成されているのでしょう。検証部会はあるわけですが、必ずしも明確なデータというのが出ていないということも聞いています。

文科省の平成 23 年 12 月 26 日の実態調査で、例えばねらいのところを見ると一番多いのが学習指導上の成果で、95％の学校で意識されています。ねらいでは、学習指導上の成果を上げるためというのがトップになっているのですが、ただ、成果を見ると、「学習指導上の成果があっ

た」というのは58%で、「生徒指導上の成果があった」というのが74%でダントツになっています。その次が「教職員の指導力の向上につながった」が50%。だから、生徒指導の効果というのが１番で、２番目が学習指導の成果、教職員の指導力が３番目となっています。成果があったという肯定的な評価は高いのですが、ねらいと成果は必ずしも国の調査などでも合致したようには出ていません。

小中一貫教育とか一貫校という取組は、呉市とか品川以外のところでも全国に広がっています。そうすると、それぞれの自治体の子どもたちの課題は必ずしも同じではない面もあると思います。練馬のような大きなところはブロックを４つか５つぐらいに分けてはどうかという話にはなったのですが、都全体から見ると、１つひとつのブロックが４つの市とか４つの町、５つの町がいっしょになったような構造になっているところもあります。そうすると、ブロック全て同じである必要があるのかということが問題になります。ブロックはブロックとして、１つの町のようなくくりの中で仮に一貫校とか連携校を模索するとしても、その特色付けというのはそれぞれで考えていってもいいのか、もしくは、練馬区という一体性からして１つで行くべきなのかということです。１つで行くべきだといっても、本当にそれぞれのブロックが全く同じように一色に塗れるのかという問題も出てくるのではないかと思います。

そういう問題といつも絡んで、先生方のご意見が出ているような気がします。案件の２番目の小中学校の組み合わせの問題が連動した問題ですので、まず資料５について、事務局からの説明を聞いた上で、小中一貫校の問題についての将来的なあり方についてご意見を承れればと思います。まず事務局のほうから資料５の説明をお願いします。

事務局

（資料５　説明）

委員長

資料５につきましては、３つ課題を整理していただいています。まず最初が事例１、複数の小学校と連携する中で、一方は隣接しているけれども、一方は距離があるという場合がリストアップされていますが、こういう問題についてどう考えていったらよいでしょうか。論点として①②と２つ挙げられています。

ＰＴＡの委員にも最初にご意見を承れればと思います。一般的に一貫校についての議論も絡めて構いませんので、よろしくお願いいたします。

委員

先ほど、中高一貫には保護者は関心があって、小中一貫には関心がないという話がありましたが、本当にそのとおりだと思っています。保護者の立場からすると、大学に行くのが最終目標という家庭がほとんどで、高校受験というものは避けられない面倒なものというような位置付けに、大体なっていると思います。大学に行くために高校受験をしなければならなかったのが、中高一貫であれば、その面倒なステップを省くことができて、部活に集中できたり、６年間ということで大学目指して受験のための勉強ができたりとか、とにかく最終目標である大学受験に対してメリットがあるというのが、中高一貫のわかりやすいメリットだというふうに多くの保護者が捉えていると思います。

小中一貫については、もちろん連携をとられるということは歓迎することです。その一方で、学校ごとに特色がある場合もありますし、その特色のある中学に行きたいとか、あるいは特別支援学級であれば特色のある小学校にもう既に通っている、そのような選択をしている部分もかなりあります。例えば小学校のときに子ども同士でトラブルがあった、あるいは家庭同士でトラブルがあったという場合に、それを小中一貫になったときにもし避けにくいとなると、これは保護者としてはちょっと歓迎できないことになり、変な縁を断ち切りたいという思いで別の学校に越境という形で逃げていくというか、中学ぐらいまでは保護者はどうしても親が手伝って守っていきたいという思いが働きますので、ある程度選べる道が残るのであれば、小中一貫もとてもいいことだと思っています。

小中一貫で１つ難しいと思っているのは、特別支援学級のことかなと僕は思っていまして、学力重視、生活力重視、いろいろな小中一貫の形態があって、既にそういう学校を目指してかなり遠くの学校に通っている場合も今既に多くあります。それが一貫教育の中に組み込まれて、通常級と同じカリキュラムに近くなると、常にほかの友だちの後を追いかけて、全てにおいて劣っているように感じてしまいます。自分は掃除、洗濯、料理、何でもできるみたいな自信があったり、走るのは得意だとか、あるいは手先が器用だったりとか、何かしらハンデを持っていても自分に自信を持たせるような教育をしている学校というのも幾つかあるわけで、そういった特色がなくなってしまうのは保護者側としては歓迎したくないところはあります。それが小中一貫の特別支援教育という形で何か実現できれば、それは逆に歓迎したいと思います。そういう形で、まだまだ小中一貫のあり方というのはこれからなのですが、保護者にとっては期待する面と心配する面が両面あるというのが正直なところです。

委員長

組み合わせのさまざまな状況ということで、２番目が進学先と連携先が一致しない場合、それから３番目は進学先が大きく分散する場合です。いずれも組み合わせの問題ですが、施設一体型を仮に模索するとしても、これだけまちまちなケースがあると、分離したものが多数残ってしまう可能性のほうが現実には大きいのだろうと思います。

そうすると、離れているけれども連携を今までのように進めていく、あるいはさらに強めていくためにはどういう工夫が必要なのか。距離が離れているときの連携となると、すぐ思いつくのがＩＣＴの活用がもっと進められないか、そのためのソフトの整備というのがどのくらい進行しているのか、あるいは、ＩＣＴだけでできるのか、行事的なものを一緒にやることのメリットを考えると、やはり子どもが移動しなければできないということもあります。先生同士の打ち合わせも、インターネットを介してとなると煩わしい。面と向かってお会いして打ち合わせをしたほうがよいとなると、その距離的なハンデをどうするか、打ち合わせの時間をどうとるかという問題も出てきてしまいます。

同時に、中学校は選択制ですが、子どもの動きとの関係で、この一貫というものをこれから先どう考えていくか、非常に整理が難しい感じはしますが、２番目、３番目に引きつけて、ちょっとご意見を承れればと思います

事務局

特別支援学級の小中一貫教育については、大変重要なことなので、本日の協議の中で織りまぜて一緒にというよりも、少し区別をした形で進めていただければありがたいと思っています。

委員

大泉桜学園では、５年生が中学校のクラブ活動に参加しているということですが、クラブ活動の時間というのは、５年生は何時までやっているのでしょう。豊玉第二中学校グループで、授業の後にクラブ活動にも参加できるようにということで条件整備を考えると、帰り道に中学校には学童養護の方はいないので、予算のほうとか、いろいろな手配もしなくてはいけないということになります。

授業が終わったら担任とともに学校に戻ってきて終わりという形を考えていたので、授業後のクラブ活動をやっていくとなると、やはり安全の手配とかそういったものもあるのですが、一体どこまでの時間できるのかなというのが１つです。担任が帰った後に、子どもを中学校に残すとなると、中学校の先生、校長先生、顧問などに責任を持って見てもらうというような形になると思うのですが、その時間の線引きというのがどうなのだろうと思っていました。

小学校、中学校がある程度の距離だから、それでもまだできるかなと思いますが、１駅乗って行かなくてはいけない距離になってくると、先ほど出たように、「近いところだからできたよ、ほかのところは知らないよ」というようなことでいいのかという問題が出てきます。そういう点でやはり時間のことについては、距離のことも関係してくるので、聞いてみたいと思ったところです。

今は小学生を担任の先生が中学校に引き連れて行ったり、または中学校が小学生を連れて来たりというように、時間が朝からということではないかと思うのですが、今後、乗り入れ授業をした場合には１日中その中学校にいることになります。クラブまで含めると、登下校での安全面だとか、小学校に来てから中学校に行くのか、いきなり向こうで現地集合にするのかとか、いろいろな時間の問題が出てくると思います。今、こちらのほうでも、最初は学校にちょっと早めに集まって、中学校の１時間目に間に合うように一斉に連れて行き、しばらくしたら今度は現地に集合というような、段階的な登校の仕方も考えられるかなということを検討しています。

クラブの問題については、何時までやるのかということを詰めなくてはいけません。給食も中学校で食べることを考えると、小学校でいろいろアレルギー対応などをやっているのですが、給食のメニューについて、１カ月前に中学校から献立をもらって検討するとか、いろいろな打ち合わせが必要になってくると思います。もし中学校にいる間に何かあった場合、緊急連絡のための調査票を中学校に備えておくということになれば、小学校のほうで保護者に協力を求める必要もあります。今のところは校外学習と同じで、何かあったら小学校に電話をかけてもらって管理職が小学校のほうで連絡対応をとるという形ではいるのですが、やはり連携が進めばそのような形になってくると思います。

授業のほうも、乗り入れの授業を行う場合、これも一体型、または隣接していれば打ち合わせは頻繁にできるかもしれませんが、中学校のほうでもやはり時間割の専科のほうの授業もあり、やれればやれるに越したことはないですが、やはり具体的に進めていくと、ガイドラインではないですが、どの辺をめどにやっていくのかも必要になってくるのではないかなと思います。

今、クラブ活動の時間の話から、あっちへ行ったりこっちへ行ったりになってきましたが、距離でできるものとできないものがあるかなと思います。ただ、離れていても連絡と連携を図って、方式とかやり方を決めれば共通理解できないこともないので、授業の初めの号令とか、授業での発表のさせ方、あとは挨拶なども、そういったところは距離に関係なくできるかなと思います。

委員長

案件３の「小中一貫教育推進会議　議論のまとめについて」これについてもご意見を承りたいと思います。資料６の説明をお願いします。

事務局

資料６につきましては、これまでこの推進会議で議論してきた内容を整理したものになります。推進会議の最後のまとめの段階では、報告書にまとめていくことになるのですが、現段階での取りまとめということで、たたき台としてまとめてみたというところです。

ですので、本日、この文章を全部お読みいただいて細かくご意見をいただくというよりも、ここまでのところを整理してみたというところなので、今後の参考にしていただきたいと思います。ざっとご覧になって感じられることがありましたら、ご意見を頂戴したいと思います。

今後の話につながるのですが、この推進会議でご意見をいただいた内容につきましては、この資料６のように整理をして、平成 27 年１月 23 日に予定しております小中一貫教育フォーラムでも推進会議の内容の報告ということで活用していきたいと思っています。

委員長

文部科学省の委託の関係で、こういう報告をすることを義務付けられています。自治体によっては、率直に言って出しっぱなしになってしまって、ほとんど反響がないケースもないわけではないのですが、練馬の場合はきちんとやってきているので、出したからにはほかの自治体にとって参考になると評価されたほうがいいわけです。

そういう意味で、このまとめというのは、この会議の意味というか、ただ国に義務として出すというだけではなくて、練馬の会議の質を評価される面もあるので、きちんとしたものを作ったほうがいいように思います。

ただ、状況が非常に揺れ動いています。練馬区長も替わりましたね。教育委員会も、来年４月から新しい教育委員会制度が動き出しますので､総合教育会議も設置されることになります。そうすると、新区長がどういうふうにお考えになのか、教育委員会の中でやっていることをそのまま受けとめていただけるのか、あるいは軌道修正が出てくるのか、こういう一貫校の問題というのは微妙に絡む可能性があります。

また、国の制度化の動きを見ると、学校教育法１条の中に小中一貫校を入れ込む、そういう法改正があると思います。

教育再生実行会議で小中一貫教育制度を制度化すべきだという提言を出しました。それを受けて中教審の諮問がなされているので、法改正があるというのがほぼ確実なのだろうと思います。そのときに、どういうふうに対応するかというのは自治体の問題です。教育委員会制度は４月からガラッと変わり、首長のリーダーシップが、かなり大きなポイントになるので、区長

がどうされるかによっても相当違ってしまう可能性があります。
いろいろ揺れ動く情勢をにらみながら、国にはこういうものを報告しなければいけません。どのような状況にあっても、できるだけいいものをつくり上げたいと思っています。
今までに議論された問題全てにかかわっても結構ですので、ご発言いただければと思います。

委員
先ほども意見がありましたが、結論から言うと、教員を含めて、取り組んでよかったなと思っています。ともかく小学校、中学校が地域の子どもを９年間のスパンで健全育成するということは、これは当たり前というか、すばらしいことというか、そう思います。
特に年々、特別な支援が必要な児童・生徒や家庭が増えてきているので、見る目が多ければ多いだけ、例えば兄弟関係について中学校と小学校とが情報を共有するなど、すごく連携がとれるのです。
最初に実践を行った小学校とは細かい情報共有ができて、不登校も減ったことは以前も話しました。また、前もって情報を得ているのでさまざまな対応ができるようになりました。
正直言って、以前はちょっと学校が落ち着かなかった部分もあるし、ルールに従えない子は不登校になっていく形があったのですが、こういう子どもなのだとわかっていけば、教員もその子どもにふさわしい対応ができるので、小学校との情報交換がすごく役に立っていて、本当にやってよかったです。
情報交換が密にして、小学校からこっちにすぐ問い合わせも来ますし、そういうような小中連携、一貫教育というのは、すばらしいことだと思っています。一番はやはり教員同士の交流、情報交換が、子どもの落ち着いた生活につながっていきますし、これはもうやっていかなければいけないなと思いますので、広めるというのはすばらしいことだと思います。
距離の差というのは埋められない部分もあるので、差が出てきても仕方がないのではないかと思います。一方で、公立学校だから同じような取組をしてくださいという面もあります。でも、目の前の学校と、歩いて７分の学校と、歩いて 20 分の学校、この３つの小学校で同じ取組をしてくださいというのはさすがに難しいのですが、同じ公立ではないですかと言われます。進学してくる生徒数の割合の差もあります。
開二小から８割が開二中に行って、開三中には２割しか来ないのに、開三中は開二小と連携しなさいということになっています。一緒にやっていって、８割の生徒は隣の開二中に行ってしまうと、これはさすがに教員のモチベーションという面では難しいのではないかと思います。グループをつくったのだから、同じ公立なのだから、８割来る開三小と２割しか来ない開二小と、同じ取組をしてくださいと言われてもどうなのでしょう。距離が離れていることも結構つらい部分ではないでしょうか。
でも、泉新小とは部活体験もやっているので、光和小の保護者から「うちはやってくれないのですね」と言われます。「でも、歩いて 20 分あるのですよ。」と言っても、「いいな、泉新小さん。いいな、橋戸小さん。光和小は何もやってくれないのですね」と言われます。光和小からは３割しか来ないのですが、光和小からうちの中学校に来る保護者はそういう目では見ないですね。「うちも同じことをやってもらいたい」となります。となると、歩いて 20 分と目の前、７分、この３つの小学校に全ての三原台中の教員が出たり入ったりするとなると、本末転倒で、本来の中学校の学校行事や教育課程が安定しなくなる懸念もあります。

今後の進め方なのですが、今はそれぞれの研究グループで何ができますかと、白紙で渡している状態だと思っています。これには自分自身が今、悩んでいます。例えば練馬シティマラソンもありますから、小中一貫教育で、児童・生徒の持久力を高めていきましょう、取組は各グループ、各小学校、中学校に任せますというように、知・徳・体のうち、知だったら基礎学力というか計算力でもいいですし､徳だったら道徳でもいいですし､授業規律でもいいのですが、知・徳・体の３つをぼんと出して、各グループ、各小中学校でどうやったら持久力をこの９年間で育てられるか、どうやったら基礎学力をつけられるか、その取組は各グループで話し合っていいですというように上から題目をぼんと言ったほうが動きやすいのでしょうか。各研究グループで何を課題改善カリキュラムでやるか、何ができるか、白紙で渡していますが、それでまた時間がかかってしまっている面もあります。

では、区教委のほうで知・徳・体については、小中一貫でこれを育てていきたいので、各グループ、各小中学校で工夫してやってくださいと言ってお題を出すのがいいのでしょうか。例えば旭丘小学校、旭丘中学校という地域には大学もあります。文化の地域なので地域独特の取組をやりたいということがあると、そういうお題が邪魔になるかもしれません。でも何かそういうお題を出して、取組は各学校で工夫してくださいというほうが動きやすいのかなとも感じます。

委員

今日の議論も含めて、私は基本的にはやはり、次の小中一貫校を考えていくべきだという立場でいます。お話に出てきたように、小中一貫校をつくることで、１つは設置者の考えをきちんと示すことができます。もう１つは、分離型で連携してもお互いのよさを見ることはできますが、小中一貫教育校の中に入ると、「だって、小学校はこうだから」とか「中学校はこういうものだ」とかいうところを一たん壊さないとできないものも多分出てくると思いますので、教員としてみると、そういう状況に置かれることできちんと再構築していくことができると思います。

最初に大泉桜学園における取組の成果と課題について質問させていただいたのは、私は同じ小中一貫校をつくるのでも、大泉桜学園と同じものを違う地域につくってもしようがないのではないかと思っているからです。参考にすべきところは当然参考にしますが、そうではない、もっと違う味のある、色のある、この地域だから、練馬のこの地域だからできる小中一貫校であるというふうにしていくことで、もしもそこで成果が出ているならば、その次につくるときは、違う成果が出るような場所だとか組み合わせだとかを考えていったらどうなのかと思っています。

そうすると、例えば、大泉桜学園があるような地域性ではないところであるとか、あるいは先ほど遠い近いというのもありましたが、場合によってはその地域に住んでいたら全部その小中一貫校に行きますよという学区ではなくて、近隣の学区からも、もし近隣の分離型の小中一貫教育を受けたいと思う人はぜひ地域の学校に行ってください、でも、近隣の学校であれば、すぐ近くに小中一貫校もありますよ､どうぞ選択してくださいというようなことをしてみると、同じ地域の中で小中一貫校を選ぶ保護者や家庭がある一方、少し離れた分離型でも小中一貫教育はできるはずだ、その場所の文化だとか考え方だとか地域性だとかを十分に生かした教育をしている向こうの学校に行きたいということもできるのかなと思っています。

もちろん、小中一貫ということで、同じように成果の出る部分もあります。逆に離れていて、小中一貫という意味ではもしかしたら不利かもしれませんが、その学校の特色とか力とかを発揮できるような学校をつくることもできるのではないかと思います。離れているから必ずしも不利かというと、考え方や見方を変えれば、不利ということばかりでもないと思います。そのためにはやはり小中一貫校のようなところに行きたいというニーズがある人には、そこに行けるような制度を整えていくことは必要だと思っています。

委員長

非常にアイデアに満ちたご発言をいただいています。事務局を介して伺ったのですが、検証部会では、学校というのは学力を形成するというのが大きな、重要なねらいではあるけれども、学力以外にも生きる力とか、情操的な豊かさとか、いろいろな教育のねらいというのがあって、学力だけに特化して成果を見るのは不十分ではないかという意見が出ていると伺いました。

今のお話を伺いながら思ったのは、多様な教育の道というか、キャリアパスは１つではないということです。今の文部科学大臣はそういう発想ですよね。東大法を出て、官庁のエリートコースを歩く人もいれば、世界に雄飛する子もいる、子どもは世界にただ１つの花という筋道をたくましく生きていけばいいと、それで、実社会に出てからそれぞれの道を勇猛果敢に生きていければいい、そのための仕組みとして、一貫校というのはある意味でスケールメリットはあると思います。小学生と中学生が一堂に会することによって、小学校だけ、中学校だけよりも先生の数が増えるというメリットもあります。

学校制度の問題になってしまうのですが、学校間ネットワークのようなものを考えていくと、小中一貫校というのは縦の連携、縦のネットワーク化です。小学校と中学校との関係を考えるとき、複数の小学校から中学校へ行く構造に大体なっているわけですから、関係する小学校も連携する緩やかなネットワークの中に組み込んでいって、全体を１つの学校というか、キャンパスは分かれていても、ネットワークとしては１つのネットワーク型の学校になっていくというようなイメージもあるのかなということも伺いながら思いました。今、国のほうでいろいろ模索していることと、非常に調和するようなお話だったと思います。

委員

今、いろいろなお話を伺っていて、少しばらばらになりますが、いくつかのエピソードを紹介したいと思います。

先ほど部活動、クラブの話があったのですが、本校も初年度は部活とクラブを一体化しました。何か似たようなことをやっているなと思ったので、それでいけると思ったのですが、ニーズや心構えが違うのでうまくいきませんでした。教科としてクラブをやるというのと、任意で参加する部活とでは心構えが違います。部活とクラブを別にしたほうがいいだろうということになって、現在はそのほうがうまくいっています。一方で、５年生以上も部活動にはぜひ入ってもらいたいということで強く勧めていますので、年々入部率は上がっていって、今年度は５年生からも参加している吹奏楽部が都のコンクールで金賞を取ることができたというのも１つの成果です。

難しいことはたくさんあり、例えばサッカーでもバスケットでも、ボールの重さや大きさが違います。けがしてしまいますから、同じ練習を同じようにはできません。そういう点で顧問

の苦労はあります。でも、小学校籍の先生たちも、管理顧問なら引き受けるということで、ほとんどの教員がみんな部活の顧問をやってくれています。中には日曜日に出てきて、一緒に参加して指導することもあります。スポーツするのが好きだからとか中学生と一緒にやるのが楽しいからと言って、そういう反応があるし、互恵性を持って教員同士がやっています。そこにやはり教員の意識改革があって、それがモチベーションとなって、子どもへの指導力改善につながっていくだろうと私は思っています。

どうしてそういうふうにできてくるかというと、やはり職員室が１つだからです。施設分離型で今、研究なさっている先生方は１つの打ち合わせをするのにもなかなか電話やパソコンでは決まらないわけですから本当に大変だと思います。その点では職員室を１つにしたことによって、思いついたことがその日のうちに話し合いに結びついて、そして方向性が持ってこられるようになっています。

また、開校以来の課題として、本校の児童・生徒は体力が弱いというのがありました。持久力を高めようということでマラソン記録会などいろいろな工夫もしているのですが、指導力全体を見直したほうがいいだろうということになりました。職員室が１つですから、そういう合意形成が日ごろからできているのです。ことしは機会を得てオリンピック教育推進校の指定を受けました。本校はロケーションからいって、北側に自衛隊体育学校などもあり、そこにはオリンピックのメダリストもたくさんいるので､そこと連携して講師として来てもらったりして、そういう能力を高める指導を教師も勉強することを考えています。

一方で、コーディネーショントレーニングという考え方がありますが、体育を教えない教員も全教員悉皆研修を夏休みにやり、指導法の工夫とか改善ににつなげて、その結果、子どもにただ「頑張れ」とか､「もうちょっと何とかしろ」ではなくて、科学的に子どもの持久力の向上を考えるようにしたいと思っています。こういうことも、小中一貫教育校として職員室を１つにまとめてもらったことが、実は大きな原動力になっているのではないかと思いました。

それから、別件ですが、先ほど資料６について簡単な説明がありました。小中一貫教育について、練馬区としてしっかりとした教育理念を構築する必要があると思いますので、もう少し議論をする必要があると思っています。この構築については、財源がなくても知恵さえ出せばできるので、やはり理念をきちんとつくるということは真理につながるわけです。理念がきちんと構築されていれば、小中一貫教育はいい形で前に進むと思っています。

例えばこの資料６の２ページにまとめ（案）として高らかに６・３制の学校文化云々という書き出しから､「義務教育９年間を見通して『小中一貫教育』を進めていくことが必要である」と言い切っています。それは施設一体型であろうと分離型であろうと、今の義務教育では子どもたちのためにそういう視点でやらなければならない時代になっているわけで、もし今小中一貫教育を進めなければいけないという考え方がなければ、いまだに小学校は小学校、中学校は中学校だよという形なわけです。特に施設分離型の学校でいろいろなことを調整するのは本当に大変だと思いますが、ここ数年の中でやってきた形がこういうまとめになってきているわけで、施設一体型の学校だけがやっていたってこういうまとめはできないわけです。そうするとやはり理念の構築としてはすばらしいものがまとまるのではないかと思いますし、これをもってすれば、いろいろな形でほかに与えるよき影響力も生まれるのではないかと思いますので、今後の推進会議でも資料６をさらにブラッシュアップすることは重要なことだと思いました。

委員長

資料６につきましては、今日、議論する時間がとれませんでしたので、お気づきの点がございましたら、後日で結構ですので、事務局までご連絡いただければということです。次回、12月に予定している推進会議までに、委員長、副委員長を含めて、まとめの案を作成させていただきたいと思っていますので、ぜひご協力をお願いいたします。

委員

私はこの練馬区の小中一貫教育で大泉桜学園とそれ以外のところでは、やはり分けて成果と課題を考えていったほうがいいのではないかと思っています。校長１人で１つの教育課程で９年間の小中一貫教育を進めるのと、たとえ一部を共有していても、校長が複数いて、複数の複線型の教育課程で教育をしていくのとではちょっと違うだろうなと思っています。

例えば、分離型だと小学校６年生は学校の最高学年としてすごく育っています。でも、９年間だと、上級生がいますから、分離型の学校よりも６年生の学校の中での活躍度合いにはもしかしたら課題もあるかもしれません。そんなことも考えられますが、いずれにしても、小中一貫の取組をやってきたことでマイナスのことはないと思います。ほぼ全てプラスの評価、あえて言えば、教員の負担はあったとは思いますが、児童・生徒にとっても教員にとっても、全ていいように働いているのではないかと思います。そういう意味で、この練馬区の小中一貫教育の施策というのは本当にすばらしいものだと思います。

これまでいろいろ先生方から出てきたお話の中でも、学校運営の改善であるとか、教員の相互理解、指導力の向上というところではかなり高い評価が得られています。けれども、子どもの変容というところでは、不登校が改善したとか、中学校へ進学するに当たっての不安感が少なくなったとか、中学校生活への意欲が高まったということは意識調査などでも検証されている部分がありますが、学力の検証はなかなか難しいと思います。必ずしも区立の中学校へ全てが入学するわけでもありません。区立以外の学校に進学する子どもの変容をどう見取っていくか、大泉桜学園は別として、分離型のところはどうやってそこを検証していくのかということを、視点を決めてもう少し深く検証していく必要があると感じています。

今年度、全国の公立小中学校の女性校長会の全国大会で豊玉第二中の長南校長先生に小中一貫教育の練馬区の取組をご発表いただきました。全国から小学校の女性校長が 400 人ぐらい、中学は 2、30 人参加していましたが、発表の後の協議の中でも大変開発的ですばらしい取組であるということで、高い評価を受けました。豊玉第二中は練馬区の中でも連携小学校とともに大変先進的な取組をしている学校ですが、乗り入れとか部活動とか給食とか、今度は新しい校舎ができるなど、小学生が中学校に行って共に学習活動をするときの課題はまだまだ山積していると思いますので、ぜひ先駆的な取組として、後から行く私たちにもいろいろな指針を与えていただきたいと感じているところです。

最後に今後の小中一貫教育の進め方ということで考えますと、確かに先ほど保護者の方たちがおっしゃっていたように、前任校の学校評価の中で「今後重点的に進めていってほしい項目」として「小中連携した教育活動」が入っているのですが、残念ながら毎年「小中一貫教育」を選ぶ方は本当に少数です。なぜだろうと考えたときに、出前授業とか部活の見学とか体験は両小学校に同じようにやっていたのですが、保護者の期待は小中連携というと、どうしても学力向上であるとか、受験に重きを置いた指導に対してとても高いので、小中一貫教育を分離型で

やったときにどれだけその期待に応えられるかというと、なかなか難しいなと感じているところです。

石神井西中学校では来年度から研究校になるということで、今年度、校長同士で話をし、コーディネーターを中心に今まで全くやってこなかった出前授業や、児童会、生徒会の共同教育活動を今進めているところですが、これが進んでいったときに、児童・生徒理解や保護者の情報共有が進み、生活指導上の成果は大きく期待できるかなと思っています。学力に関して言えばその次かなということですが、いずれにしても、私はいい取組だと思います。

最後に、２校目の小中一貫校ですが、事務局にも伺いたいのですが、豊玉第二中の新校舎が完成しつつありますが、豊玉第二中を一貫校にというお考えはなかったのかどうか。私は、開進第四中の校舎を新築するに当たって小中一貫校にすればいいのではないかと思ったのです。18 学級、普通教室がありますので、そこは小学校から２学級規模、２学級×９学年で 18 学級の施設一体型の一貫校です。

それはなぜかというと、練馬区は学校選択制度を導入していますので、中学校は基本的に選択できる状況にあるわけです。ですから、ブロックという言い方をあえてするかわかりませんが、数校つくって、そして小中一貫校を選ぶのか、それとも分離型の連携校を選ぶのかは保護者の選択、その子どもの適性で選べる余地があるといいと考えています。

いずれにしても、今後も施設一体型、施設分離型にかかわらず、やはり小中一貫教育、連携教育の取組はそれぞれの地域の実態に応じて、粛々と進めていくべきであるというふうに私は考えています。

委員

小中一貫教育に関して、せっかくここまでこういう形で練馬区として研究を進めてきているわけですから、これまでの成果を大切にしながら、今後も進めていきたいと強く思っています。特に今、大泉桜学園の具体的ないろいろな成果のお話がありましたが、そういう具体的な形として出てきている部分もたくさんあるわけです。それを一体型、分離型、あり方によって活かされ方は違ってくると思いますが、ぜひいろいろな形で継承していければと思っています。

教員の意識は、やはり変わってきていると思います。具体的にお互いの授業を見合う、それから児童・生徒の様子を語り合う、教科指導等に対する意見交換をいろいろ進めるという中で、また、そういう公式の場だけではなくて、例えば懇親会を行う機会もありましたし、そういう中で本当に交流が進み、小学校の先生は中学校の教員や中学校教育のこと、それから中学校の教員は小学校の先生の考え方や小学校の子どもたちのことを意識するように随分なってきているなというふうに思っています。

今後も互いに取り組みやすい環境づくりというか条件づくりに具体的に取り組んでいくことが必要なのかなと思います。そういう意味では、豊玉第二中、開進第四中にいわゆる交流教室という連携専用の教室ができるということですが、それも１つの具体的な姿かなと思います。具体的なものを通して実践を進めることによって、より意識が深まっていくのではないかなと思っています。

それから、実は私、小学校に３年間校長でおりまして、大変勉強になりました。それで今、中学校に戻って、ものの見方とか本当にいろいろな形でその経験が活かされている部分がたくさんあります。中学校から小学校の校長先生になるような取組は今後も続けられると、よりい

ろいろな見方ができる管理職が増えていくのかなと思っています。
　それからもう１点、小竹小と旭丘小の件で、適正規模のことが今日レジュメに出ていました。私、小竹小の元校長ですので、非常に気になっているところなのですが、地域協議が今、継続中ということで、もしくは次回以降、差しさわりのない範囲で結構なのですが、そこでどんな話題が出ているのかということも少し情報として提供していただけると参考になる部分があると思っています。よろしくお願いいたします。

委員長
　時間がちょっとオーバーしてしまいましたが、最後に案件４、今後のスケジュールについて説明をよろしくお願いいたします。

事務局
　（資料６　説明）

委員長
　それでは、以上をもちまして第６回練馬区小中一貫教育推進会議を閉会させていただきます。
　次回は 12 月 15 日の午後２時からとなります。どうもお疲れさまでした。

（閉　会）